り作業も次第に組織的なものになろう.

政府や政治家が直ちに行動するとは考えにくい. 直ちに行動を開始できそうな社会的勢力は, 大学の研究者集団と仏教教団やキリスト教教団の研究者集団であろう. 当然ドラッカー学会も重要な役割を担う一員である.

【注】

- (1) 山縣俊夫 [2011] 「経済社会シミュレーターによる政治経済分野での『知的生産性向上』の可能性」ドラッカー学会年報 Vol.6 pp.215-236
- (2) P. F. ドラッカー (上田惇生訳) [2008] 『産業人の未来』ダイヤモンド社 (2-1)pp.243-252, (2-2)pp.270-272, (2-3)pp.272-280, (2-4)p.280, (2-5)pp.272-273, (2-6)pp.277-278, (2-7) pp.275-277, (2-8) pp.140-141, (2-9) p.163, (2-10) pp.253-254, (2-11) pp.263-264, (2-12) pp.282-283
- (3) P.テイヤール・ド・シャルダン (美田稔訳) [2011] 『現象としての人間』 みすず書房 (3-1) pp.71-74, (3-2)p.79, (3-3)p.212, (3-4)p.277, (3-5)pp.118-119, (3-6)pp.240-242, (3-7) p.301, (3-8)pp.334-345, (3-9)p.339, (3-10)p.252
- (4) 庭野日敬 [1989] 『新釈法華三部経』 佼成出版社 (4-1) 第1巻pp.127-129, (4-2) 第1巻pp.59-396, (4-3) 第1巻pp.164-189, (4-4) 第1巻pp.264-300, (4-5) 第1巻pp.330-334, (4-6) 第2巻pp.203-214, (4-7) 第7巻pp.307-383, (4-8) 第10巻pp.197-199
- (5) R.B.フラー (東野芳明訳) [1985] 『宇宙船「地球号」 操縦マニュアル』 西北社 (5-1) pp.98-110
- (6) R.B.フラー(梶川泰司訳) [2007] 『クリティカル・パス』 白揚社 (6-1) pp. 268-278, (6-2) pp. 278-280, (6-3) pp. 268-270
- (7) F.A. ハイエク (田中真晴他編訳) [1986] 『市場・知識・自由』 ミネルヴァ書房 pp. 165-186
- (8) F.A. ハイエク (嶋津格監訳) [2010] 『ハイエク全集 Ⅱ 哲学論集』 春秋社 pp.3-24
- (9) C. メンガー(八木紀一郎他訳) [1971] 『一般理論経済学1』 みすず書房 (9-1) p. 27
- (10) C.メンガー(八木紀一郎他訳)[1971]『一般理論経済学2』みすず書房 (10-1)pp.289-292
- (11) K.R. ポパー (大内義一・森博訳) [1971] 『科学的発見の論理 (上)』恒星社厚生閣 (11-1) p.24, (11-2) pp.14-15, (11-3) pp.30-58
- (12) 住明正他 [2012] 『計算科学 計算と地球環境』 岩波書店
- (13) 眞田芳憲 [2005] 『日本人のためのイスラーム入門』 佼成出版社 pp. 20-21

【略歴】1948年茨城県生まれ、茨城大学工学部機械工学科卒(生産工学専攻)、㈱日立製作所入社、重電機工場の生産技術部門にて蒸気タービン・水車の羽根曲面数値制御加工用自動プログラミングシステム、コンピューター制御式生産設備システム等の開発に従事、情報システム部門の技術管理(設計事務管理、研究開発管理、技術教育)等に従事、関連会社にて変電システム訓練施設の運営・管理に従事、2008年、定年退職、

[対話]

観察法の観察

Dialogue: Observing How He Observes

上田惇生

Atsuo Ueda

(本会学術顧問,ものつくり大学名誉教授)

井坂康志

Yasushi Isaka (東洋経済新報社)

論じきれない原因

井坂 ドラッカーが生涯に刊行した書物は39冊, 論文や記事にいたってはあまりの多さに正確な数さえ知られていない. その旺盛な活動の根源は何だろうか. 何が知の巨人の活動に尽きせぬエネルギーを備給していたのか.

上田 あらゆることについて、瞬時に本質が見えてしまうからだろう。考えるほどにドラッカーはとらえどころのない論者だ。彼の著作をほとんど翻訳した今でも、謎は尽きない。彼について書かれたものは決して少なくない。1950年代の初来日以来、ドラッカー論は一つの経営学上の潮流を形成してきた。そのなかで「マネジメントの父」「マネジメントの発明者」などといった称号を与えられてきた。

しかし、マネジメントとドラッカーを一対のものとして扱うのに、その世界 の広がりはあまりに無辺だ、たぶんその広がりの様態が、かえってマネジメン トというややもすれば安易な独房に彼を閉じこめるのに手を貸してきたと感じ られなくもない。

井坂 実際に彼がマネジメントの自己規定に窮屈さを感じていたのは間違いない. 1970年のニューヨーク大学時代に行われたインタビューで,「自分はマネジメントには少々飽きた」と述べていたのが表れだ. むしろ, マネジメントの枠組みを外したところに彼の実像があると考えてよいだろう.

上田 だが、これがなかなかに難しい。そこに何かあるのは確かながら、あたかも太陽を直視できないように、相貌をとらえることができないためだ。彼について語ることの難しさは、今なおきちんとしたドラッカー論がさほど見あた

らない事実からも類推可能だ、少なくとも、既存の知的方法論、言い換えれば 手持ちの道具を使って語ることはできそうもない、せいぜいのところ、社会生 態学といった未来の知的領域くらいしか彼を語るにふさわしい語彙は今なお存 在しない.

ある程度知的に洗練された書物にあっても事情は変わらない. きちんとみご とに論じている先行例というのはさほどあるわけではない、多くはたとえよく できたものでも、ドラッカーの一部分に照射したものに過ぎない。

井坂 では、なぜ歴代の篤学者でさえ、彼を論じきれないのか、努力や能力の 不足が原因ではないと思う。むしろこれまで多くの人たちがしかるべき熱意と 真摯さをもってドラッカーの全貌をとらえようと努めてきた。 にもかかわらず、 その全体の把握に成功してこなかったのは、能力や熱意を超えたドラッカーに 内在する本質に原因があるのではないだろうか。

それは次のような問いにも置き換えられる.「なぜ定型的な語彙でドラッ 者かとの問いの次数を一次元上げたものといってよい、実はまさに「定型的な 説明を拒否する | そこが彼の本質的な領域を構成するのではないか.

事実、約100年近くもの長きにわたり活躍し、世界的に知られた人にもかか わらず、まとまった批評的言説が存在しない、これは驚くべきことと言わなけ ればならない。かりに標準的なドラッカー論がすでに存在するのであれば、人 はそれを手がかりにすることができる。批判するにせよ、まるごと受け入れる にせよ、とりあえず手がかりがある. しかし、現在のところはそのようにはなっ ていない、定説と言えるものはいまだない。

上田 彼については「20世紀に身を置きながら21世紀を支配する思想家」とい う言い方がなされている. 恐らく. その志を考える上では正確な論評のように 思われる。というのも、人間はいかに多面的な活動に手を染めようとも、その 目指すところは一つに違いない、どんなに複雑なプリズムにも光源が一つある ように、そこには明確な目標があったと思われる.

彼の目標は一つの手段では達成できないために、さまざまな方法を試すこと で表現されたのだと思えてくる。その多面的な活動の核に一つの戦略目標が あったに違いない.

そのようなことが可能だったのは、彼自身に、ものごとを分解せずに全体を 全体として理解し、かつ表現する能力があったためだ、

視覚を観察する

井坂 彼はあまりに多彩であった、異常な視野を持っていた。一つに収まりき れないほどの関心を持っていた。博学者であった。そのような評価はすでにい くたびも出ている.むしろ,彼を評する際の枕詞と化しているふしさえある. しかし、私はそのような評言はあまり正確ではないと思う、たぶん彼自身が一 つの領域の仕事だけでは、どうしても自分が行いたいことをうまくとらえきれ なかった、だから、知的領域を少しずつ、時に大胆にずらしながら、結果とし て多様な領域を構断するような知的探索形態をとらざるをえなかった。ドラッ カー自らが自分の表現活動を通して、「何を自分は見たいのか」を探っていた のではないかと思えてくる.

その一つに彼が60歳の時のインタビューでの象徴的な発言がある. これか らの人生をどうしたいかとの記者の質問に対し、「今もって大きくなったら何 になりたいかがわからない と答えている。これは決して冗談めかして言われ たものではなく、彼の本音であったと思う、60歳にして明示化しえないほどに、 彼が目指したものはわかりやすいものではなかった。ひょっとすると本人さえ 正確なところはわからなかったのかもしれない、結果として、95歳で亡くな るまで、「自分探しの旅」は続いたのだと思う、

そのように多分に「未完の可能性」を言論でもってその都度実現していく生 き方を彼は選んだ. 自分自身がわからなかった自分の正体を第三者が簡単に レッテル貼りできるはずがない. そこがドラッカーについての定型的説明が今 なお現れない理由の一つだろう。

上田 しかし、一つキーワード、あるいは補助線がある、彼が観察者であった、 そこにヒントが隠されていると思う.

確かに彼は特有の雄弁さをもってこの世界を描いた。では、その雄弁さをもっ て彼が描こうとしているのは、いったいどのようなものだったのか、それは一 言でいうならば、観察者ドラッカーの眼によって切り取られていく世界そのも のだ。それはきわめて正確にスキャンされた光景であり、綿密かつ正確であり ながらも、ほぼプロセスを受けていない光景だった。

わけても特徴的なのは眼だ、その眼は精巧無比なカメラのレンズのように微 妙な細部にいたるまで丹念に手が入れられており、およそ凡俗な類型にはまる ことがない、それでいて、感覚と生命に躍動している、頭で考えられた人間や 社会ではなく、眼で見取られた人間や社会を扱っている.

井坂 ドラッカーはイギリスの作家ディケンズを生前愛読したという. 例えば. 次のようなディケンズ評(「イギリスの目 |) がそのままドラッカーを評するも ののように思えてくる。

「ディケンズは視覚の天才であった. 若いときのものでも、(なるべくは) 壮 年時代のものでもよい、その肖像は一種独特の目に支配されている、美しい虚 妄を追う、あるいは哀調をおびてかげる詩人の目ではない、やさしさも甘さも なく、熱っぽい夢幻性もない、冷たく、灰色をして、鋼鉄のごとくきらめく、 あくまでもイギリスの目だ。」(シュテファン・ツヴァイク/柴田翔・小川超・ 神品芳夫・渡辺健訳『三人の巨匠』みすず書房)

ディケンズにも似た視覚の作用は、彼が自らの来し方を描いた自伝的書物 『傍観者の時代』にいかんなく表れている.そのなかでドラッカーは自らが目 にした光景、出会った人々の多くについて、何らかの個人的反応を示すことに なる. しかしそのような彼の反応や交流といったものは. 本人の個人的な意識 とは直結していないように見える。そこには一貫性があるものの、彼の個人的 な視覚がほとんど時代が据え付けたカメラのように平明に読み手の心に迫って くる.

上田 そのなかで彼がもたらしたものは、真にオリジナルな情報であり、大き な意味を持つニュースだった. そしてマネジメントの討究にいたっては. 掛け 値なしに新世界の発見にも等しいことであったと思う。しかも書き手としての 卓越性が彼には備わっていた。マネジメントをはじめとする著作の雄弁性は、 読み手の無意識な理解力を喚起する。

彼は彼にしか書くことのできない作品をマネジメントなどの領域で真摯な姿 勢で書き続けることによって、文学を含む言語の世界全般に対して、鮮烈で広 汎な影響を与えることになった。その影響力は『もしドラ』の成功からも明ら かなように、半世紀近くを経てもまったく弱まっていない、これは驚くべきこ とだ

井坂 『傍観者の時代』のなかで、彼は一人称の語り手としての役割を果たす。 彼は20世紀という物語の声となる.彼は周囲を深く観察する人間であり.生 き生きと報告する人間である。彼は自らの身体を物理的に動かし、自らの視覚 を刻々と移動させながら、時代の紡ぐ物語を逐次報告する.

対象に密着し、あるいはまったく離れながら、時代とともに前に進んでいく、

彼の眼は世界の一片一片を切り取っていく、語られる細部の一つ一つが、等し く魅力的な触感を持っている。そして読み手は、そのカラフルな報告に耳を傾 けながら、それが行きつくであろう新たな地点への思いを馳せる.

上田 今なお『傍観者の時代』に根強い愛好者が絶えない理由もそこにあるだ ろう. 欧州からアメリカという20世紀文明の中心を突き抜けるようにさまざ まな光景が車窓に現れ、さまざまな人が登場し、さまざまな出来事が持ち上が る. 私たちは頁をめくりながら. ドラッカーの一対の眼を通して20世紀の展 開を眺める、それはある面で陳腐な客観性などものともしない強い説得力を持 つ.

そのようなことが可能になるのも、何より彼の筆力の確かさ、そして彼の 視線の一貫性によることは間違いない. 彼はビジネスにおいても. 真摯さ (integrity)を重く見たが、真摯さとは言い換えれば、目指すべき理念と現実 的所作の一貫性を意味する。東洋的に言えば知行合一だ。そのような視線の一 **貫性のなかに、逆説的な形で普遍性が立ち現れてくる、そこにドラッカーの思** 想の形態が存するように思われる.

井坂 確かに彼の視線を見ることによって、読む者はさまざまな事象について のその所見の様態を知るようになる. そして. 彼の生きる姿勢に対して. 共感 もする、ところが、そのような共感によって、彼の人間的本質をとらえきれる かというと、そんなことはない、私たちがそこで理解しうるのは、あくまでも、 彼の視線を通して切り取られた世界に過ぎないためだ。

いずれも高度に具象的であり、触知可能であるものの、それによってドラッ カーがいかなる思想の持ち主で、どのような人間なのかについてはほぼ知りよ うがない、にもかかわらず、不思議なことに、その視覚は読む者の内側に潜む 何かを刺戟し、異なる風景を見させるようになる、恐らくドラッカーを知るに は、間接的ながら、彼の視線を観察することが迂遠ながらも最も近道なのでは ないかと考える理由がそこにある.

断絶とゼロ体験

井坂 他方、ドラッカーもまた時代の子である、さまざまな時代環境や人的交 流の結果形成された存在だ、ドラッカーの言説には、互いに矛盾する要因が無 数にある。互いに弾き合う性質が、多くの場合共存している。そのようなスタ

イルはもちろん彼一人の専売特許ではなかったし、彼が自力で打ち立てたルー トでもない、その前には先達としてエドマンド・バークやウォルター・バジョッ トその他の保守主義系統の思想があった.

同時に、そのような視覚の動きがどのような環境の中で育まれたのか、どん な人から影響を受けたのか、などを引証しながら、その実像に迫っていくアプ ローチがある

上田 それともう一つ. 個人的な体験としての「断絶」があっただろう. 彼が マネジメント、イノベーション、マーケティングとか知識社会、高度産業社会 の記号を先取りしたせいで、私たちは何となく彼が同時代人だと思っている。 しかも、彼がマネジメントの書き手として活躍したのがアメリカだったという だけで、彼が生粋のアメリカ人のように感じてしまっている、しかし、そうで はない、彼は本来ヨーロッパ人だ、しかも、1909年生まれである、時々彼は 「僕は明治人だ」とユーモアを交えて語っていた. 日本で言えば明治42年の生 まれの人だ. これは盲点かもしれない.

言い換えると、第一次世界大戦 (1914年)、世界恐慌 (1929年)、第二次世界 大戦(1944年)がほぼ前半生に重なってくる。マネジメントについての最初の 書物を『現代の経営』(1954年)とすると、すでに刊行時に彼は44歳、立派な 中年の域に達した後の著作だ、こう考えると、その前半生たる戦争、恐慌、革 命の海を泳ぎに泳いでマネジメントの島嶼に到達したことがわかる.

井坂 確かに指摘の点は深い意味を持つと思う、その一つの表れとして、特に 初期の作品では、ナチズム体制とそれに無力な社会への怒りがほとばしる箇所 が見られる。もちろん図式的なプロパガンダではなく、一方通行のステートメ ントでもない. そこには彼の眼によって切り取られた生きた世界観がある. し かしそのような種類の厚く鋭い視線は1950年代、『現代の経営』によるマネジ メントへの傾斜以降、彼の言語世界から徐々に失われていくことになる。たぶ んそれが彼自身のマネジメントへの倦怠の遠因ともなったと思う.

上田 事実、20世紀の激動は彼の人生そのものだった、特に少年時代はいま だ故郷のウィーンはハプスブルグ帝国の首都だ、これは他の世代に見ることの できない。きわだった特徴だろう。その世代は戦争の展開とともに成長してき た、物心ついたときからずっと世界は潜在的に戦争状態だった、「戦争をして いない欧州 | を知らない、そのきなくささを日常的に呼吸し、迷走する世界を 自己同一性の基本に据えていた.

特に第一次世界大戦だ、彼はどこかで書いている、新聞の戦死者欄で知る者 の名を探すのが日課となっていたし、「大きくなったら」というのは、子供心 にも兵士となって戦場に行くのと同義と考えられていた。そんな少年時代だっ

マルクス主義もキリスト教も戦争を止められなかった。そのなかで、イデオ ロギーが実は無内容な空語なのを市民の実感として、あるいは生活者のリアリ ズムとして知っていた。世界戦争には大義がないこと、いずれ瓦解するだろう ことまで予測していた人たちも当時いた。中でも当時のウィーンの知的な人た ち、 例えば「言葉の狩人」の異名を持つ言語学者で若きドラッカーにとっての 憧れだったカール・クラウスなどがそれにあたる.

井坂 彼も戦争、恐慌の嵐をともかく生き残って、荒廃した欧州でもう一度生 活を再建しようと考えていたに違いない、そのような人たちにとって世界大戦 はリアルな経験ながら、さまざまな苦労のうちの一つに過ぎない、そんな世代 の人たちが懐疑的な精神の持ち主になるのは、歴史的事情からすれば当然だ、 しかし、それは単なる虚無的な懐疑主義とは趣を異にする。

ドラッカーは5歳まで一つの帝国のなかで育てられ、その世界しか知らな かった、そのような世界しか知らないのに、ある日突然、帝国が崩壊し、現実 と思っていた世界は無効だと宣告された. いわばゼロ体験である. このゼロ体 験は個の人生の中でとてつもない意味を持つと思う、その社会で価値ありとさ れていたものを自らの価値として血肉化していた少年が、ある日それを捨てろ と言われた、晩年になっても、彼はその時の精神的衝撃を折に触れて口にして いた

そのような断絶経験を経てその知的・感性的深みは決定されたのではない か. その後も彼は驚くほど似たパターンをいくたびも実人生で行っている. 一 言で言えば、「成功体験の体系的廃棄」とも呼べるものだ。

上田 確かにそのような側面はある。1930年代ドイツで一定の成功を収めな がらも、世相との価値観のずれを感知するや即座にイギリスに移住する。イギ リスでも経済的にはそれなりの成果を手にしながらも、金に興味のない自分を 翻然として悟り大不況の中仕事を辞めてしまう.ようやくたどり着いたニュー ヨークで超有名コンサルタントにして大学教授の地位と肩書を得るも、さほど 名の知られていない西部の大学に移籍したりしている。プロセスを見れば、成 功を捨てていく過程と同じだ.

井坂 しかし、少年時代に経験した断絶を考えれば、何か急激な変化が自分の 身や社会に訪れたとしても、天蓋が崩れるような衝撃を感じることはなかった. それは彼個人の断絶体験の追体験だったと見ることもできる。むしろある時点 から以前の自分を切り離し、訣別して、今日から新しい自分が始まるといった アクロバティックな生き方を死ぬまで続けた. そこに喜びさえ見出した.

批評性の淵源

上田 冒頭の問題意識に戻る、彼の著作は、マネジメントに関わるかどうかに 関係なく、いまだに胸を衝かれる鋭利な批評性がある、1930年代に書かれた『経 済人の終わり』や1940年代の『産業人の未来』など初期著作に漂う圧倒的なま でのリアリティにわれわれはもっと驚いていい.

井坂 前著はチャーチルをはじめ、当時の知識人にいち早く認められたと言う が、当時の編集者や批評家たちの中には、低めに評価した者もいたと思う、そ れを一時の奇抜な論者として高をくくり、いずれ消えてしまうだろうと思って いた人は少なくなかっただろう、戦後の日本においても、やはり彼をただのビ ジネス書ライターとしてしか見ず、いずれ消えるだろうと思った人々が少なく なかったのに似ている.

だが、ドラッカーは消えなかった、他の多くの論者が消えても、本人が此の 世を去った後さえ、消えなかった、なぜ消えなかったのか、それはリアルタイ ムでの読者たちが、見落としていたものがあったからではないか、

やはりそこでも少年時代の断絶を避けて通ることはできない、彼は第一次大 戦前に己の半身を取り残している。少年期の経験も、心の動きも、全て帝国以 前の記憶に貼り付いている。少年期に吸った空気、概念や審美観や価値は、自 らに受肉してしまっている. それを捨てるならば自分が立ちゆかなくなる. そ れは彼の精神構造のみでなく、文明の構造そのものでもあったからだ、

第一次大戦後にもなお生き延びるに足るものは何か、人間社会が維持しうる ぎりぎりのものは何か、それを探し出して、何とかして、それを戦後の半身に 縫合しなければならない。たぶんマネジメントというのは縫合のための最も有 効なのりしろというか、より糸だったのではないか、彼が日本の明治維新に同 質のものを見出し、そこに自らの志操を仮託したのはそのためだろう.

では他に誰かいないかと思っても、少なくともハプスブルグ帝国にどっぷり

浸かっていた人のなかには見出しえなかったはずだ、その仕事の模範はヴァル ター・ラーテナウをはじめ、いくたりかしかいなかったと思う、国と社会は違 えども、渋沢栄一はその重要な人物の一人だ、切断された社会の半身を奪還し て別の原理を持つ社会に縫合してみせた成功事例を語れるものはほかになかっ た. しかし残念ながら同時代人ラーテナウはドラッカーが少年時代に暗殺され てしまう、だから、彼は独力で、可能な知識をフル動員して方法を発見しなけ ればならなかった.

上田 確かにそういうふうに考えたのが、あの文明の断絶を経た世代の特徴だ、 その使命感は、先行世代にも後続世代とも共有されていない、そして、彼のい ささかわかりにくい特性の多くは、この世代的な条件づけによって解釈可能だ と思う.

それにマネジメント、文明批評、技術論あるいは美術など個別的な彼の仕事 については、きちんとした批評の言葉が存在する、それらがきわめて質の高い ものであり、それまでの常識を打ち破るものであるということは、繰り返し言 及されている。しかし、その全てに通底する根本的な志向性、あえていえば「ド ラッカーはどこからきて、どこに向かおうとしていたのか | について問いかけ た論者はあまりいない。

井坂 彼がめざしていたのは、途方もなく素朴なものだったと思う、それは社 会のなかの高質な存在、あえていえば「美質」に対して敬意を払い、次の世代 に継承することだった。彼は保守主義者である。日本に限らず世界のどの社会 についても、父祖から受け継いできた伝承や技芸に対する配慮と敬意がある. 彼が日本美術や技術に関心を寄せたのはそれらが凝縮的に表現されていたため だろう。

そのために彼は多くの敵と闘った. 青年期彼はナチスと闘った. 彼は当時ふ つうなら踏み込んではいけないところにさえ踏み込んだ。ゲッベルスをはじめ ナチス幹部にインタビューさえした. そこにまっすぐ踏み込む市民は. ふつう はいない、それだけのリスクを冒すことはしない、でも、彼はそれを恐れては いけないと思っている。

社会を保守に値するまともなものにしようと思ったら、ふつうの市民が勇気 を持つべきと考えていた、真摯さとはそのようなことだと思う、孤立無援のな かでも、なすべき仕事は果たさなければならない、彼にはその覚悟があった。 侍や騎士のエトスに近いものが感じられる.

そのようなものを安易なあやうさや品性の下劣さ、卑しさに委ねない決意が 彼にはあった。この社会は自らのかけがえのない資産なのだから、引き継いで いかなければならない。そのような志が今にいたってことさら感じられる。

【略歴】上田惇生 1938年埼玉県生まれ. 慶應義塾大学経済学部卒業. 本会学術顧問,

ものつくり大学名誉教授. ドラッカー著書のほぼすべてを翻訳. 著書に『ドラッカー入門――万人のための帝王学を求めて』(ダイヤモン

ド社) 等.

井坂康志 1972年埼玉県生まれ. 早稲田大学政治経済学部卒業. 東京大学大学

院人文社会系研究科社会情報学専攻博士過程単位取得退学. 現在東

洋経済新報社勤務.

ポスト「もしドラ」時代のドラッカーマネジメント

Drucker Management in the Time of "Post" Moshi-Dora

岩崎夏海

Natsumi Iwasaki

『もしドラ』こと『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』は、おかげさまで本当に大きなヒットを記録した。アニメや映画にもなり、社会的ブームを巻き起こした。

しかし、ブームというものはいつか必ず終わる.そしてブームというものの宿命で、それが一旦終わってしまうと、かえって古びるのも早い.「『もしドラ』ブーム」も、多くの人にとっては、今や「過ぎ去ったブーム」のように映って、古いものと見なされている向きがないわけではない.

しかしながら、実は『もしドラ』は今でも読まれ続けている。書籍は、2011年に入ってからも月間3000冊ペースで売れているし、各地の図書館でも、読むには順番待ちが必要だ。さらには、「上司が部下に読ませたい本ベスト10」などといったアンケートを取ると、ドラッカーの『マネジメント』とともに必ず上位に顔を出す。

このことは、とりもなおさず『もしドラ』が、また、それがテーマとした「マネジメント」が、単なるブームで終わったのではなく、広く社会に定着した証と見ることもできるだろう。『もしドラ』は「ベストセラー」なだけではなく、「ロングセラー」にもなったのだ。

このような現象を、ドラッカーの『マネジメント』の中にある「社会に受け入れられるものというのは、こちらが売りたいものではなく、顧客が求めているもの」――という考え方に当てはめてみると、『もしドラ』が受け入れられたのは、こちらが売りたかったからではなく、多くの顧客が求めていたから――と捉えることができる。そしてそれは、取りも直さず「社会がドラッカーの『マネジメント』を求めていた」ということに他ならない。そのことが、『もしドラ』ブームが去った今、ますます強く実感されるようになった。

そこでここでは、そんな「ポスト『もしドラ』時代」だからこそ見えてきた、